

## 山に親しみ山に想う (3)

### — ウェストンと「日本アルプスの登山と探検」 (1) —

<文・写真> =岡本=

1. ウォルター・ウェストンとその著書「日本アルプスの登山と探検」(1896年刊)は、日本山岳会発足の契機を提供すると共に日本アルプスの名を世界に知らせることに貢献した。日本の近代登山史を語る上で「日本アルプスの登山と探検」はなくてはならない記念碑的文献であるという。ウェストンは1861年(万延2年か文久元年)イギリスのダービー市で生まれ、ケンブリッジ大学を卒業、更に神学校に学んだ。17才でスイス・アルプス登山を始めて10年程経験を積んだ。その間「山こそわが友」という終生のモットーを胸に刻みつけたという。



1888年(明治21年)英国聖公会の宣教師として来日し、熊本、神戸の教会に籍をおいた。1890年に宣教師を辞し、1891年(明治24年)から1894年(明治27年)にかけ、四シーズン中部地方の日本アルプスを集中的に登山・探検し、同1894年10月末に帰国した。1896年(明治29年)に英国山岳会会報などに発表してきた日本アルプスの登山記をまとめて本書を著した。1891年から四シーズンの登山・探検資料は、来日外国人のための「日本旅行案内」の改訂版に寄稿されているが、本書にも16章で「装備、食糧などについて」として日本の山岳地帯を旅行する際の心得を事細かに書いているのはそのためである。

ウェストンは、30才から33才まで四シーズンの毎夏、日本アルプスに赴き多くの登頂を果たしたが、赤石岳、恵那山、前穂高岳、大蓮華山、笠ヶ岳、焼岳、常念岳は外国人による初登頂であり、日本の近代登山の黎明期にあって輝かしい業績をあげた。

2. (1) 書名から判断して、専ら日本アルプスの登山記として登高の苦闘や登頂の喜びを綴ったものと思い読み始めたが、単なる登山記ではなく、幅広い「日本見聞記」として知的関心をいざなうものでもあるとの感想をもった。

少なくとも二つの点で、優れた本であると思う。一つに、本書を書く姿勢である。大勢の外国人が疾駆する馬上から眺めただけで物知りぶって見聞記を出していると、日本人作家がこぼしていたが、「そんな非難をうけないように慎重に筆をすすめるつもりである。」と謙虚に取り組む姿勢を述べていることである。だが、魔が差して筆が滑ることはあるものである。

二つに、探検・登山記として、山の形状、登路、溪谷、森林、岩、展望などを描写しているだけでなく、明治中期の山村の生態を観察する慧眼は、民俗学者や文化人類学者のものであるということである。近代文明隆盛の恩恵を受けること未だ少ない山村の暮らしぶりを物質面と精神面の双方で生き活きと蘇らせてくれる。それはまた、現在の世知辛い世間で崩れつつある、取り戻すべき良俗を教えてくれている。更にその慧眼は、日清戦争期の山村住民の気概、潜在力などを洞察し、序文で次のように日本の将来を見通している。「今日の日本には、みずからの国家的威信を損なうことなしに西洋文明を摂取し、同化する能力を示すユニークな一個の東洋民族が住んで

いる。この注目すべき民族が、現在では予測することもできないほど豊かな将来を約束されていることは、ほとんど疑問の余地がない。彼らは自国の国威を発揚するためなら、どのような自己犠牲をもちとわないのである。」と。

(2) 歴史、文化、宗教の異なる外国を正しく認識するのは、至難の技である。ウェストンとしたものがこうも記している。「イギリス式の海軍とドイツ式の陸軍とによって守られた首都や開港場をはなれた中部日本の奥地へと足を踏み入れると…別の世界に迷い込んだような気分になるのだ。とにかく、このあたりの知的水準は、19世紀的というよりは9世紀的なのである。」と。イギリスは産業革命後ほぼ1世紀を経て、文明の利器の豊かさは抜群であり、他方、日本の山村はその面では遅れているのは事実であろう。しかし、「知的水準は9世紀、1000年前並」とは心外である。この慧眼ならぬ僻目は、イギリス人読者のウケを狙って筆が走りすぎたうえのもの、好意的に受け止めた気もする。国民の知的水準の目安として、義務教育制度の施行を調べるのが適当ではないか。イギリスが義務教育制度を施行したのは19世紀後半である。日本は明治4年の1872年に学制を公布し(6才以上の教育)、ウェストンが在日中の1890年(明治23年)に小学校令で尋常小4年の義務教育を施行、1900年(明治33年)に教育無償とした。これをみると、イギリスと大差ないのである。イギリスでは政府が教育に関わる前は、教会に関わる学校や私立のパブリックスクールがあったが、日本では藩校、郷学、私塾、寺子屋などがあった。明治初めには全国に約2万の大小の学校が簇生したという。山歩き中の経験である。高川山から田野倉駅方面に下山し、稲村神社境内の尾県郷土博物館を見学した際、係の者からその古色の資料館は、明治10年(1878年)に地域の素封家が組合組織で創設した学校の校舎であると聞いた。

苦情ついでに、もう一つ 的外れの記述を記す。「三々五々、村の小学校に通う子供たちが、誰にいわれたわけでもないのに丁寧にお辞儀をしてくれるのを見ると、日本はまだまだ文明化(ヨーロッパ化)されていないのだと、いまさらながら気づくのであった。」と記している。これも優れた射手にしては手元が狂い、的を外した見方ではないか。挨拶を子供の純朴な心根の現れと受け取れなかったのか。これも山歩き中の経験である。檜原村の千足を歩いていると、自転車に乗った登校中の中学生の一団が朝の挨拶「おはようございます。」と投げ掛けて通り過ぎた。文明化された現代でも、山村住民は優しく自然に挨拶が出てくるものなのだ。その朝は一層清々しいものとなった。

3. (1) 日本アルプスの印象はどんなものだったのか。日本アルプスを北から南に縦走し、御岳を下山した後に、「こうして私は、日本アルプスに別れを告げた。日本アルプスには、氷河をまわってきらきらと輝く峰はない。また、その規模は有名なスイス・アルプスに比べると、ほんの三分の二にしか当たらない。それは事実としても、その溪谷の絵のような美しさと、広大な山腹を覆って静まり返っている暗い樹林の荘厳さは、私がヨーロッパ・アルプスで見たものをはるかに超えていた。」と樹林と溪谷を賞している。

(2) アルピニストとして、岩峰に関心があるはずである。岩登りで満足しているのは、穂高の頂上付近でのこと、「岩はこれまで経験したことがない硬さと険しさで、これを登るために全精力をふり絞ったが、それだけに気分は昂揚した。12時45分、険しいアレート(鎌尾根)の上に登り立ったが、ここから上がいみじくも「直立する稲穂の山」と名付けられた巨大な花崗岩の岩塔群である。1時30分というころ山頂のピナクル(尖塔)に達した。」と記している。穂高でアルピニ

ストの登攀欲を満足させているが、他の山ではそれほど昂揚しなかったのか、そんな記述がない。苦勞した忘れられないこととして、笠ヶ岳登山の時に水を含んだ 森の中で、「牢獄のような湿地帯での藪漕ぎの難行は、日本以外の山々を含めた私の全登山歴をつうじて、もっとも辛かった経験として一生忘れられないだろう。」と記している。スイス・アルプスでは藪漕ぎはなく初体験だったのだろうか。

(3) 穂高登山の際は、かの嘉門次が案内人だった。ひどい雨降りの時で、「山案内人として紹介してもらった嘉門次という猟師は、これではとても出発できないと言った。川が増水すると魚がたくさんでるので、山案内よりも釣りをするほうが実入りがいいのだ。」「三人の猟師が鉛をつけたこまやかな絹の魚網を編んでゆくのは、おもしろいみものだった。」と記している。猟師が獵の途次、おかずの魚を川釣りするのは読んだことがあるが、漁師への変身は初耳である。嘉門次は「小男で醜男のクチ」であり、「同行してくれた猟師たちは身体つきは小柄だが、頑丈で



よく働いてくれた。」とも記している。

雨が止むのを待つ間、嘉門次から、橋場と島々の間に全く橋がなかった頃の「雑炊橋の言い伝え」や氾濫した川の流木は下流の拾いあげた村の収益とされる云々の話を聞いている。

(4) 嘉門次との対話ぶりからすると、神戸と熊本に3年間居たとはいえ、日本語が相当できたと推察できる。別のところで、「二里」が「ニュリュ」に聞こえるのは、母音転訛の例であると述べ、「よそから来た日本人と土地の子のために通訳させられるめになったことがある。」とも記している。

4. 日本の高山において過去に氷河が存在したかをめぐって、1910年(明治43年)頃より第1次氷河論争が起こる。第1次論争の時期より前のこの時期、氷河の存否について直接言及していないが、日本アルプスを縦走した際に、「これほどひどい雪にもかかわらず、氷河や氷河作用の痕跡が見当たらない。… 堆石(モレーン)とか、条痕のある岩や漂石などが、まったく目にふれないのである。」と記している。



5. 山村住民の近代登山に対する認識について、「区長(村の顔役)には、外国人が銀の鉱脈も水晶もない山に登ろうとしているのは、まるでわけのわからないことだった。」と記している。日本山岳会も無いこの時代に山村住民は、猟や山仕事で山に入ることはあっても、わざわざ登らない。山岳地帯の人は山に登らないのが普通である。高い山の無いイギリスで近代登山が始まった。スイス・アルプス山麓のスイス人が始めたわけではない。

6. 苦勞の末頂上に到着しても、そこでの眺望 や感動などの描写が意外なほど短くあっさりとしか記していない。何故なのだろう。本場のアルプスと比べてしまうのか。常念岳には三度目の挑戦で漸く登頂を果たしたのに、「この鋸の歯のような山頂にはじめて外国人の靴跡がしるされたのだ。」「昔、天狗を祀った小さな祠があったという。」くらいしか記しておらず、すぐ下山している。これに比べ、乗鞍岳や槍ヶ岳では常念岳より詳細であるが、淡々としたものである。他方、立山の頂上では、巡礼者や神主の様子、御神酒を頂いたことや室堂は「山国日本のクラブ・ヒュッテともいうべき施設である。」と記しており、眺望などより、民俗的なことに強い関心を示している。(つづく)